# 世界を賭けろ　――　レイズ・ザ・ワールド

ビエンヤク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を賭けろ　――　レイズ・ザ・ワールド

【Ｎコード】
Ｎ２３２１Ｙ

【作者名】
ビエンヤク

【あらすじ】
【レイズ・ザ・ワールド】はもう一つの現実とも呼ばれるほど高い再現性を売りとした、最新のヴァーチャル・リアリティ技術を取り入れている話題のオンライン・ゲームだ。しかし、未だに不安定な技術と満足に機能しない電脳法に支えられた世界は、必ずしも安全な空間と言えるわけではなかった。それでも人々が惹かれてやまないのは、今とは違う自分になれる世界だからだろう。現実では理不尽に夢を奪われた少女ヒナタとその友人の、危険で騒がしいもう一つの現実の物語がここに始まる。

## カクセイキョウ1

２０１７年、人類は脳をコンピュータにつなげる事で、仮想の現実を体験する技術を手に入れた。

当初こそ名前倒れの『現実（笑）』に過ぎなかったが、仮想現実にかける人々の意気込みがあったのだろう。瞬く間に研究、発展、開発が行われ、かなり精度の高い現実の再現が行われるようにもなっていた。

あと十年もすれば、それなりに満足できる新世界が作られるだろう。

人々のそんな期待を大きく裏切る事件が発生したのが一年前だ。

オンライン・ゲーム【レイズ・ザ・ワールド】が発表されたのである。

もう一つの現実というキャッチコピーに相応しいリアリティは、まさに人々の思い描いた、未来の仮想現実そのものだろう。

だが、人も法も、いまだその未来の技術に適応するには、まだしばらくの時間が必要らしい。

二つの現実を舞台に、人々の思いは交錯する。

◆　◆　◆　◆　◆

「ひっ」

イェルの目の前で巨漢が振り上げたのは、その体に相応しい子供の身の丈もありそうな大きさの剣だ。

昼過ぎの市場でそんなものを振り上げたのだ。周りを歩いている人間たちも巨漢の動作に気づいたのだろう。誰かの悲鳴が上がり、一斉にイェルとその巨漢から一定の距離を取る。
イェルもそれに合わせて男と距離を取ろうとするが、間に合わない。

「おぉおおりゃぁあああっ！」

かけ声と共に振り下ろされる剣は直前までイェルの立っていた石畳を砕き、円形に陥没させ、巨大な音と無数の飛礫を撒き散らす。
これが暴力なのだと言わんばかりに。
間一髪、飛び退いて逃れたイェルは、市場の隅にあった露天の果物がクッション代わりになって、果汁まみれではあるが怪我はしていない。

「おいお前っ、売り物どうしてくれんだよっ！」
「ぼ、ぼくに言わないでくれよっ！」

いつの間にのがれたのか、野次馬連中の中から、果物屋の店主らしい男がイェルに怒鳴る。
しかし、そんな声に構っている暇は無い。

「逃げるんじゃねぇよっ」

抜け出そうともがくイェルの足を、巨漢が勢いを付けて踏み砕く。
巨大な剣を振り回して揺るがない足腰だ。鎧も着けていないイェルの足はあっけなく踏み砕かれて、悲鳴が喉から押し出される。

「死ね、死ね、死ね、死ね……死ねッ」

そして今度は殺す事ではなく、なぶることを目的としたらしい剣の腹が、イエルの右腕に振り下ろされる。

「うぐがぁあああっ」

痛い。

大けがを負ったときは熱いとか言うけれど、それは嘘だとイェルは思った。

痛い。

いや、腕を潰される程度ではたりないのか。

痛い。

痛みが強すぎて、とにかく痛い。

痛い。

痛い痛い痛い痛い。

「お、おい、あれおかしくねえか」

「もしかして、あいつ」

今さら周囲が騒ぎ始めるが、イェルにはそれどころではない。

イェルの悲鳴が気に入ったのだろうか。

巨漢は、残されたイェルの左腕に、再び剣の腹をたたきつける。

「……っっ！」

イェルの喉は、もう悲鳴を上げることも出来ない。

背筋を反らせて音にならない絶叫をはき出すだけだ。

それが不満だったのか、巨漢は一歩下がって再び剣を振り上げる。

今度こそ殺すのだというように。

巨漢は果物に恨みでもあるのか、イェルごとまとめて全て吹き飛

ばそうとするように、鉄塊のような剣をフルスイングする構えを見せる。
両腕と片足を潰されたイェルに、抵抗する術はない。
当たる、そして当たって死ぬ。
「……食べ物は、大切にしろよ」
そんな事を言っている場合じゃ無いだろうとは思ったが、言葉になったのはそれだったのだ。
イェルの言葉に、巨漢は何も反応しない。
これが遺言かよと、イェルが自分にツッコミを入れて、こんな事ならカッコいい死に際のセリフでも考えておけばよかったと後悔する。
そんなイェルの内心も知らず、巨漢はその剣を無慈悲に振り下ろす。

「うぉおおおりゃぁああっ！！」
天が落ちてくるような暴力。
襲い来る痛みを恐れて、ぎゅっと目をつぶるイェル。
そしてその体は空を舞って――
「……ああ、死ぬような瞬間はアドレナリンが出るから痛くないって、本当なんだ」
「実はそうでもないよ？」
女の子の腕の中にいた。
「へ？」

軽い音が体の下で聞こえて、それが、自分を抱えて巨漢の剣から逃がしてくれた女の子の靴音なのだと、イェルは数瞬遅れて気がついた。
それなりに整った見た目をした、高校生くらいの少女が、痛ましそうな目をイェルに向ける。
服装はよくわからない。膝あたりまで覆う使い古されたマントが、首から下を隠している。肩口で結ばれた長い黒髪が、顔に当たって少しだけくすぐったかった。

「ごめんね、人が多すぎてすぐに近寄れなかったから」

イェルの体を下ろしながら言い訳を口にして、女の子はマントの中を少し探ってカードを取り出し、空に掲げた。

「レイズ、レイズ、レイズ……【理解の癒し】」

カードは言葉が終わると薄青く光り、それに合わせてイェルの体から痛みが消える。

「痛みが、ない？」
「痛み……？　ＨＰなら、全回復してると思うけど」

女の子の言葉に誘われるように意識を視界の左上に向けると、そこに赤い棒でＨＰの残量が表示される。ほとんど減っていない状態にまで、ステータスとしては回復していた。
それでもイェルの手足には違和感が残り、少し前までそこがどんな状態だったのか、イヤでも思い出されてしまう。

「まあ、足りなかったらまた回復するから」

今はコッチが先かな。
女の子が振り返ると、そこにはエモノを取られいきり立つ巨漢がいた。

「おい、何してくれんだよ」

血走った目を女の子に向けて、巨漢は今にも飛びかかってやると言わんばかりに身を乗り出している。

「それはコッチのセリフだから。こんな場所（市場）で堂々と戦闘なんて、何してるのよ」
「そいつが俺にガン付けたんだ、悪いのはソイツだ」

イェルからすればガンを付けたわけではない。実物と見間違えそうな仮想現実で、これでもかと筋肉の鎧を誇示するような戦士の男性を見かけたのだ。もの珍しさに少し目をひかれても仕方が無いところだろうが、運が悪かった。
未だに立ち上がれず「い、いや、そんな」と目を伏せるイェルを背に隠すように、女の子が一歩前に出る。
危機一髪の所を女の子にお姫様だっこの格好で助けられた上に、背中にかばわれまでしている。イェルのＨＰは平気でも、イェルの中の少年は恥ずかしさや情けなさに殺されそうだ。

「だからって、明らかに初心者なんだから、いきなり攻撃するなんてカッコ悪いと思わないの？」

女の子の言葉に周囲が無責任なヤジを飛ばし、巨漢が歯を剥く。

「別にいいだろ、システムが許してるんだ」

「過度のハラスメントは別って、利用規約読んでないの？　あんな風にもう一人の自分（アバター）をもてあそばれて、悲しくならないわけないでしょ」

女の子の言葉がよほど気にくわなかったのだろう、巨漢が路上につばを吐く。

「バッカじゃね？　ただのゲームだろ」

「そう、ゲームね。だったら、ルールが適用されるなら従いなさい」

女の子の手がマントを翻すと、皮鎧の胸元で、金と銀で作られているらしいブローチが陽光にきらめく。

「おまえ、金の樹かっ」

「私はフリーのサポートマスターだから違う」

サポートマスターは、ゲーム内で問題が起きた場合の仲裁役だと、イェルは数十分前にチュートリアルで教えられた事を思い出す。

この事態をどう収めればいいのか、それこそ命がけで困っていた所なので、これでようやく安心できると、胸をなで下ろす。

イェルがゲームを始めてからまだ一時間、その時には全く予想していなかった展開だが、ゲームならではの一つの経験と思おうと、オチまで考えてすっかり終わった気分だ。

「さ、大人しくジェイルでアカウント停止処理を……」

武器を降ろすように示しながら話しかける少女に、その武器が振り下ろされる。

少女が近づいて３ｍに減っていた間合い。

その程度の距離なら、巨漢にとって即殺の間合いだ。

振り下ろされた剣は、次の瞬間にはその全力を持って路地の石畳を砕き、衝撃で土煙を上げる。

「へっ、大人しく捕まるかよっ。サポートマスター相手なら、殺して逃げりゃいいだろ」

土煙の向こうだが、イェルにははっきりと、巨漢が笑う様子が見えるようだった。

残虐さと傲慢さをうかがわせる笑顔は、さっきまで自分に向けられていたものだから。

だが、イェルには見えていた。

「私は”誓いを立てし　金枝銀葉の　魔法剣士”ヒナタ」

立ちこめた土煙が吹き抜ける風によって散らされ、イェルの前に、蒼い燐光を纏った女の子の姿が現れる。

巨漢の振り切った剣は、その靴の先に叩きつけられたらしい。それはそうだ、人を切った剣で地面を叩いて、土煙が上がるはずはない。

「キミの反逆は受け取った」

ゲームであるレイズには、いくつか特殊なシステムがある。

その一つが『名乗り』だ。

システムによって割り当てられるキーワードの組み合わせで創られる称号を名乗る事で、ステータスが底上げされる。

名乗りによって解放された魔力を受けて、ヒナタと名乗った女の子の身につけている皮鎧の表面に、無数の魔術刻印が薄青く浮かび上がる。

「ちっ、”絶叫を賛歌する　黒雷の　大剣使い”ゼーガッ」

男の方も雰囲気に押されたのか、それともステータスを上げなければ負けると判断したのか、応えるように名乗りを上げる。

名前と共に吹き上がる燐光は黒だ。光なのに黒いという矛盾する魔力は、男の手元の剣に吸い込まれ、その刃を黒に染めながら倍ほども伸長させる。

元から子供の身長ほどもあった剣は、今やイェルが見上げるような巨漢という使い手も相まって天を突くような威容だ。

恐ろしいのは見た目だけではないらしい。腕を慣れさせるために片手で軽く振るっただけで、並んでいた露店の一つを、売り物の鎧ごとあっさりと切り裂いてしまう。

「くかかっ、どうだ、俺の黒くて固くてデカい武器はっ！！　コイツでお前を串刺しにしてやるよ」

「ソレもハラスメントに数えるわよ」

「出来るモンなら、やってみろっ！」

構え直した大剣を構え直した巨漢は、串刺しと言った通りにするつもりなのか、鋭い踏み込みで体ごと突進し、黒い光を撒き散らしながら刺突を繰り返す。

並の槍より長いかもしれない大剣を、重量を感じさせない速度で扱う巨漢に対し、ヒナタはあまりにも小さく細い。

イェルは瞬きも忘れてその見つめてしまう。

だが、見つめていたはずの姿は、次の瞬間に消え去っていた。

「「なっ？！」

目を疑ったのははイェルか、巨漢か、それとも未だに周囲を取り囲んで物見している見物人達か。

そして次の瞬間には、更に大きな驚きの声が当たりに響いた。

――　ズンッ……

どんな衝撃を叩きつけたのか、巨漢の体が小さな家ほどの高さに浮き上がっていた。

「……重いか」

今まで巨漢がいた位置には、大きく天地をつなぐように足を開いたヒナタが立ち、そのかかとが巨漢の顎に叩きつけられたのだろうと、その姿勢からだけうかがわせる。

中国拳法の型に、そんな形があったかもしれないとイェルは思い出す。

もっともそれは、人を数メートルの高さに蹴り飛ばすような物では無かったが。

「ぐ、おぉおおおおおっ！」

そんなヒナタに対する巨漢もただの乱暴者では無いらしい。

空中で何が起きたか把握し、巨大な剣の質量に任せて体制を整え、ヒナタにその切っ先を叩きつけようと狙っている。

もう一つの現実とも言われるこの世界で、ステータスの助けがあったとしても、それだけの動作が行える技量は並ではない。

だが、ヒナタもただ落ちてくるのを待っている事はしない。

いつの間に懐から取り出したのか、四枚のカードを両手で空中に貼り付ける。

「レイズ、レイズ、レイズ、レイズ……ッ【慈悲の炎】」

ヒナタの体を囲むように並べられたカードが燃え落ちて、そこから大人の身の丈もある巨大な火球が。
それを頭上に掲げたヒナタと、落ちてくる勢いで唐竹割りに大剣を振り下ろそうとする巨漢。
もしこれが、さっきまでであれば、勝負は

「バカめッッ！！」

その火球の向こうまで切っ先が届かない、巨漢の負けだっただろう。
だが、今の巨漢は長射程を誇るその自慢の大剣で、火球を貫いてヒナタに攻撃出来る。
巨漢も無傷では済まないだろうが、それでも目的は達成出来る。
ヒナタを、殺せる。

「逃げてっ！！」

そんな巨漢の様子が火球の下にいるせいで見えないのだろう。
ヒナタの動じた所が無い様子に、イェルは声を上げる。
だが、ヒナタはにやりと笑って、その靴のかかとを高らかに石畳に打ち付けた。
その足下に光が走る。
薄青い魔力が火花を散らしながら、イェルにはいつの間に刻んだか分からない魔術刻印を活性化させる。
次の瞬間、ヒナタの足下から猛烈な風が吹き上がり、渦を巻いて空まで上る。
それはヒナタと巨漢の間にあった炎の塊も飲み込んで、一瞬にして巨漢の体を炎の竜が飲み込むように、緋色の柱に隠して焦がす。
そして火柱が消えると、気を失っているらしい巨漢が倒れ、ヒナ

タがやり過ぎたかという表情で立っていた。

◆　◆　◆　◆　◆

「道を空けて、ほら、通れないからっ！」
「すみませーん、とおりまーす。金の樹でーす」

人混みをかき分けて近づいてきた二人の男がヒナタの姿を認めて敬礼する。
金の樹。
サポートマスターの権限を与えられたメンバーで構成される、いわばこの世界の警察に近い組織だ。
ケンカの幕引きらしいと、集まっていたヤジ馬たちが三々五々と散っていく。
壮年の男が若い男に巨漢を連れて行けと指示してから、ヒナタに歩み寄って改めて敬礼を行う。

「お手数をおかけしました、ヒナタさん」
「ごめんね、依頼されたワケでもないのに、管轄で問題起こして」
「いえ、事情はリーンさんから聞いています。ご協力感謝します」
「え、リーンいたんだ？」
「ヒナタさんが無茶しないように、早めに出向いてくれと言われましたよ」

過保護だなぁといって、ヒナタは少し嬉しそうに笑う。

「じゃ、私はこれで――」
「お待ちを。ヒナタさんは金の樹にいらしてください」
「事情聴取とか、しなきゃだめ？」
「そちらもすべきですが、ギルドマスターがヒナタさんとお話した

いと」
「……わかった、行くよ。面倒じゃないと良いけど」
「面白い話だそうです」
「ああ、だめだ。逃げたいなー」

不満そうに呟くヒナタは、思い出したように振り返ってイェルに向き合う。

「大丈夫？」

何がとは、あえて言わないのだろう。
イェルはそっと胸に手を当てる。
視界の隅に表示されるＨＰは先ほどの回復でほとんど満タンだ。
巨漢によって潰された四肢の違和感もようやくひいて、今は普通に立っていられる。

「ぼちぼちかな」
「ぷっ、そっか。ぼちぼちか」

何がおかしいの口元を隠して吹き出すヒナタが、数度深呼吸して笑いを抑え、真面目な表情を取り繕い、深く頭を下げる。

「お騒がせしました。対処が遅れたことを、運営に変ってサポートマスターのヒナタが謝罪します」
「い、いや。助けてもらったし」

キミが悪いワケじゃ無いしと続けて、イェルは周囲にほとんどいなくなったヤジ馬だった人達に目を向ける。

「また何か問題があれば、金の樹に連絡してください。チュートリ

アルでサポートコールは習ったかな？」
「だいじょうぶ」
「じゃ、私はこれで失礼します……」

一度頭を下げてから、ヒナタはイェルに何かを言おうとして、開きかけた口を閉じる。
何を言おうとして、どうして思いとどまったのか。
『あんな風にもう一人の自分（アバター）をもてあそばれて、悲しくならないわけないでしょ』

イェルはなんとか、慣れない笑顔を顔に作り、ヒナタに微笑みかける。

「またね」

ヒナタは、それに嬉しそうにうなずいてから、人混みの向こうに向かうために背を向ける。
そして思い出したように振り返って、笑顔を見せる。

「ゲーム、愉しんでね」

◆　◆　◆　◆　◆

ヒナタが立ち去ってから、イェルはそっとため息を吐く。

「ゲーム初日から、可愛い女の子と仲良しか。運がいいねぇ」
「中身はおっさんかもよ」
「やっぱ、おっかねぇ」

イェルが振り返ると、二人の男が立っていた。
「ケリーに、ディロスか？」
「そういうアンタは、イェルだろ？」
「護衛のくせに、なにやってんだよ」
護衛と言われて、ケリーと呼ばれたひげ面の壮年男は面倒臭そうな顔をする。
「いまの騒ぎじゃ、俺達の必要なかっただろ？」
「護衛対象を不興にさせるのは御法度じゃないのかよ」
「べつに、子守をするための傭兵じゃないからな」
「……いちいち気に障る言い方するな」
「そりゃすまん。俺はウソもおべっかも死ぬほど嫌いでな」
「いっそ死ねばいい」
イェルの半ば本気の言葉に、ケリーは笑って答えに代える。
ケリーとディロスは知っているのだ。
本来、このレイズというゲームでは再現されない痛みの感覚を、イェルは実際と同じように体験するという事を。
まして、もしも死んでしまえばどうなるか分からない。おそらく本当に死んでしまうだろうと、イェルは考えている。
それが理由での護衛なのだ。
「で、状況は」
イェルの言葉に、ケリーは肩をすくめる。
「例の『試供品』は、教主様が大変気に入っているらしい」
「そっちじゃない」

「例の計画まではおおよそ、一週間ってところか。教主様ったら、ホントにやるのか」
「ぼくに言われても困るけど、それなら明日までには完成品を渡す必要があるか」
「がんばってくれよ」
「あんたたちも仕事をしてくれよ」

心得ましたと、おどけて笑うケリーの背中から、ディロスがイェルに声をかける。

「……そろそろ時間だ」
「わかった」

そして、三人は揃って人の中に姿を消す。
妙に甘ったるい、人を落ち着かなくさせる臭いを残して。

『世界を賭けろ　――　レイズ・ザ・ワールド』
ｒａｉｓｅ１：　カクセイキョウ　ＷＡＫＥ　ＵＰ

## カクセイキョウ2

レイズには都市と呼ばれるプレイヤーの拠点となる街がいくつかある。
その中で最も大きく人気を得ているのが『赤き巨壁の古き王国』の王都、ターツラルだ。
巨大な城を中心に作られた城塞都市で、一般的な日本のファンタジーの王都と考えて間違いない。
レイズの世界において唯一、モンスターの勢力を前に引くことをせず、平野にその拠点を構えているという設定らしい。
王都と名乗るだけあり、多くの建物が並んでいる。そんな中で一際目を引くのが貴族街で、遠方から運ばれる華やかな発色の染料を使った煉瓦や、金銀のみならず、神銀や青銀、赤黄金などで装飾を施された家々が立ち並んでいるのだ。
そんな中で、他の館より一回り大きな金の樹のギルドハウスは、よく言えば質実剛健、悪く言えば地味さで周囲から少し浮いていると、ヒナタは以前から思っていた。
もうちょっと、それっぽい装飾を足せばいいのにと。
だが、これはこれで金の樹らしいとも思うので、複雑な所だ。きっと、彼らには華やかな装飾は似合わないと。
そんなとりとめも無い事を考えながら、なれた通路を歩いてギルドマスターの部屋の扉を叩き、中に入る。

「お邪魔します」
「おつかれー。騒ぎに巻き込まれたんだって？」
人なつこく笑いながら、応接用のソファーにだらしなくもたれかかった姿で挨拶するのが、金の樹のギルドマスター、ロップイヤーだ。

犬の獣人種ながら、獣人族が得意な肉弾戦ではなく、魔法を好む変わり種のプレイヤーだ。頭に乗っている垂れた犬耳がトレードマークで、幼い外見から、ヒナタはロップくんと読んで親しんでいる。

「呼び出してすまない」

岩から切り出したような体を折って頭を下げているのは、サブマスターのルーガロッチという竜人の男性だ。竜人らしい重厚なしゃべり方と動作、そして年長者としての見識などもあって、金の樹のご意見番という立ち位置を任されている。

ヒナタとはベータテストからの知り合いで、サポートマスターになるための人格試験などを兼ねたクエストに挑戦する際に、共に背中を預けた仲だ。

ちなみに、ルーガロッチでは普段の会話で面倒がすぎることから、ヒナタはルーさんと呼び習わしている。

「急ぎの用事だったんでしょ？」

「いやー。そういうワケじゃないけどさ、ちょっと相談がしたくてねぇ」

相談と言えば聞こえは良いが、間違いなく面倒事につながるという事を、ヒナタは短くない付き合いでよく知っている。

「面白いおはなし？」

「とっても」

「いやだなー」

「喜んでよ」

ウラは無いよと言って笑うロップイヤーに、ヒナタはわざとらしく眉を寄せて見せる。どこまでもシラジラしいことを言えるのだ、この若い男は。

「まずはコレを見て欲しい」

ルーガロッチが手を開くと、その上の不自然な薄緑色の光を放つ板が現れる。

「あれ、レイズの中なのに、ＶＭで映像再生できるの？」

「この部屋だけは別だ。他の場所のように『相応の手段』を用意しなければ、映像資料の一つも扱えんのでは、仕事にならんからな。ほれ、みろ、始まるぞ」

ルーガロッチに促されるまま、ヒナタはのぞき込むようにしてその板に目を向ける。

ロップイヤーは既に見たのだろう、ソファーにしなだれかかったまま、耳を軽く上げるだけだ。

＜目を覚ませ、人類よ＞

その板に現れたノイズが次第に鮮明になり、枯れ木のような老人の映像を結ぶ。

＜我々が見ているこの世界は、監獄のようなものだ＞

「なに、これ」

良いから見ていろとルーガロッチに顎で促されて、ヒナタは大人しく集中する。

＜感じた事はないだろうか。ココは本当の自分なのかという疑問を＞

＜その問いは正しい＞

＜世界は欺瞞を隠している＞

＜我々の居場所だとされているこの世界は、現実（リアル）という場所も含めて仮想なのだ＞

＜目を覚ませ、人類よ＞

＜私は本来の肉体が存在する、本来の現実からやってきた＞

＜そこには、君たちを本当に必要とする世界が存在する＞

＜目を覚ませ、人類よ＞

＜私と共に、現実へと帰るのだ＞
映像が終わった後に、王都ターツラルの地図が写され、その一角に印が表示される。
そこに来れば、何かあるというのだろう。

「どうだ？」
「どうだって、言われても。どっかのアーティストの新しすぎるＰＶとか？　しょうじき、どこがいいのかさっぱり」
あまりにもコメントしずらく、ヒナタは聞かないで欲しいと両手を挙げる。

「ボクからしたら、あなたが目を覚ましてくださいって所かなぁ」
「お前は、時々そうして毒舌になるな」
「そうです？　普通ですよぉ」
にっこりと笑う表情はいつも通りだが、唇の中央が嘲るように少し持ち上がっている事は、ヒナタにもルーガロッチにも隠し切れていない。

「『覚醒教』と名乗る連中がレイズのゲーム内で増えている。コレはその勧誘映像だ」
「センスないね」
「ある意味では古式ゆかしいが、若い奴らにはわからんだろうな」
少しあきらめの入った口調は、他の金の樹のメンバーの反応に、何かを諦めたからだろう。
現実では四十代が目の前に迫っているというルーガロッチと、平均年齢が学生の範疇に収まるレイズの多くのプレイヤーでは、世代の差で話しが通じない事もそれなりにあるのだ。

「危険ならログアウトすれば良いと考えて、軽い気持ちで見学や入信を行っているらしい。信教は自由で良いと思うが、覚醒教には危

険がありそうでな」
「なんでよりにもよって、レイズで新興宗教なんて面倒なこと……」
「んー、さっきのＰＶをみる限りだとさ、現実の再現度が高くないと成り立たないお話じゃん？」
光栄な話しだよねと微笑むロップイヤーに、二人は白々しいと目だけでツッコミを入れて、話しの続きをする。

「ログアウトした現実も、実は仮想だって？」
「このゲームでなら、あり得るかもって、一瞬思う気持ちはわかるんだよねー。ほら、レイズの再現度の高さが話題になったときに、同時に軍がほしがってるーとか、そういう噂もあったし？」
「あ、それ実話だって。玲二さんがオフレコで言ってた」
「統括デザイナーの話なら、ホントっぽいね。まあ、メディア心理学の観点からすると、もう一つの現実って言える再現度は、現実を陳腐化させてみせるわけでー」
レイズでは、システムメニューを呼び出してログアウトボタンを押すことで、オンラインゲームの世界から現実世界に帰る事が出来る。
ただし、レイズのあまりに高い再現度もあって、寝ぼけた時には現実でもレイズにいるような感覚になることがある。それはヒナタも経験した話しで、分からないこともない。
だが、もしも現実を仮想とすりかえたとして、そんな事をして何の意味があるのだろうか。考えれば考えるほど、ヒナタは苦笑するしかない。

「ロップ。お前の中の人の専門分野で語りたいのは分かるが、そろそろ本題に戻れ。ヒナタ、最近になって悪質なＰＫやＮＰＫのハラスメントが頻発しているのは、実感していると思う」
「まあ、ついさっき相手にしてきたからね」
「とりあえず、こんなのが資料だね」

ロップが手の中に生み出したホログラフィカルな映像を、何枚もヒナタの眼前に乱雑に投げる。
それは写真や映像だ。
複数人で一人を暴行しているもの。
一対一でも、ヒナタがここに来る前にとめた事件のように、必要以上に相手をいたぶるようなマネをするもの。
めちゃくちゃになっている建物から、金の樹に拘束されたらしい男が引かれていく写真など。
犯人は男性女性問わずにおり、共通点があるとすれば、現実ではありえない鎧姿の人間達の写真だということだろう。ファンタジー映画の中から、小悪党が一般人をなぶっている一場面の物を切り抜いて来たようにも見える。
背景に見覚えが無ければヒナタも趣味の悪い映画の一幕だと思っただろう。
だが、見覚えがある以上、これはレイズで実際に起きた事件なのだ。
ヒナタはそんな写真や映像に眉をしかめるものの、金の樹に協力して、何度か現場の手伝いをした事もあるので、目をそらすことはしない。

「それでさー、ＰＫしてる人達の共通項として、この覚醒教の本部に踏み込んだアクセスログが検出されているんだよ」
今度はＶＭではないパピルス製の資料がヒナタの前に投げ出される。
世界観に合わせた紙だが、内容は印刷されたと一目で分かる体裁で、レイズの中世欧州のような世界観が好きなヒナタとしては、読みやすいのが助かる反面複雑な気分になる。
読んでみるとそれは複数人のプレイヤーのアクセスログ――要するに建物や区域を移動した際にシステムが残す足跡で、いずれも一カ所ずつ、二種類のマーカーで色分けされている。

「どの資料でも金の樹にアクセスした時点で止まってるってことは、その直前のマーキングが、ＰＫをしたタイミングかな？」
「そして、そのさらに手前のマーキングが」
「『覚醒教』の本部ね……覚醒教の信者が人を襲ってるって事なの？　襲えって命令されてるとしたら、何のための命令で、どうして従うのか」
「そこら辺を調べるために、手が欲しくてな。どうにも加害者の言動にそういった物をうかがえなくて困っているんだ。強いて言えば、どいつもこいつも『ムカついてやった』らしい」
ムカついて。
捜査をする人間としては、ある意味で恐ろしい言葉だ。
突発的な情動は、そのきっかけが掴みにくい。
ただ、資料からうかがえる、ハラスメントに抵触するようなＰＫやＮＰＫの数は、『覚醒教』の映像が発表された直後から急増しているのは間違いない。

「これじゃ、『覚醒教』が絡んでるって言い切れないんじゃ無いの？」
「コンピューターに解析させた結果で、それっぽいのが『覚醒教』だったんだ。違反者のログを解析するのは保安の関係でいつもやっていることで、理由が出る方が珍しい事だ。捜査する理由はそれだけでも十分にある。何もなかったら、それはそれでいい」
「とってもクサいけどねー」
ヒナタから見て、ルーガロッチは本当に念のための捜査なのだろうと分かる。
ただ、ロップイヤーは普段のゆったりしたしゃべり方のなかに、どこかとげを含ませているように感じられて、落ち着かない。
ヒナタが同化したのかと視線を向けても、ゆったりした笑顔でごまかされて、その本音までは見通せない。

しかたなしに、ヒナタはルーガロッチに話しの続きを促す。

「それで、私の役目は」

「先ほどのデータを根拠として、金の樹が主体となって、覚醒教の本部に踏み込んで査察を行おうという話しになっている。それに同行してもらいたい」

「それ、ゲームマスターの仕事じゃない？」

「大人の事情でな、信教の自由を盾にされると、責任ある立場の人間は動きが取りにくい。だからこその、金の樹だ」

「プレイヤーがプレイヤーとして、不審な行動は自重してねーっていう分には問題無いからさ」

査察の申し出は拒否もできるしと、ロッププイヤーは付け加える。

ただ、それはあまり意味が無いと、ヒナタでも分かる。

プレイヤーの自治組織が主導する査察の申し出を拒否するなら、今度はシステム管理者から強制的な調査が入る。

金の樹の査察を入れて、なにか事件に関わりがある物を発見すれば、それはやはりシステム管理者が踏み込む理由になる。

やましい所が無ければ、それはそれで問題無い。

あまり結果に違いはないのだ。金の樹と、レイズの運営であるロートル社にとっては。

「大人って汚いね」

ルーガロッチを、半ばにらむように見つめながら、ヒナタは苦笑する。

「汚い仕事を引き受けるのが大人だ」

「それで、私にも大人の仲間入りをしろってこと？」

「断ってくれてもいいよー？　ほら、金の樹だけで踏み込むと、増長がどうとか文句いう人がいるから、外部の人にいて欲しいって理由なのさ。まあ、キミがさっきのＰＫと関わったのも運命かなーと

思って声をかけたんだけど」
その答えには、ヒナタも納得した。
たしかに、先ほどのＰＫとこの連続した事件については、興味があるのだ。
「ゲーム内の治安維持に協力っていうのは、望むところだよ。金枝銀葉の誓いはウソじゃ無いから。ただ、ゴリ押しの強制捜査で、本当にこの事件は収められるのか。そっちが心配」
「……近いうちに作戦概要を説明する」
ヒナタの懸念に対して、ルーガロッチは何か思うところがあるのか、それだけを返答して帰るように促した。

◆　◆　◆　◆　◆

金の樹の廊下を歩きながら、ヒナタは考える。
普段のルーガロッチは、悪く言えば親切を押し売りしかねない性格で、よく言えばもっと熱い男なのだ。少なくとも、ヒナタはそう思っている。
だが、今回の話では冷静な説明に重点を置いて、その心情をうかがわせなかった。
そのアタリが、ヒナタの中にひっかかりを作っている。
「なんなんだろ……喉に小骨が刺さったような」
窓の外を見つめると、遠くで黒い雲の塊が渦を巻いているのが見えた。
嵐という事はないだろうが、それでも大雨は来るかも知れない。
そんな考えが、ヒナタの不安をいたずらにあおる。
「よお、お疲れさん」
そんなヒナタの後ろから声をかけたのは、金の樹でも特に親しい

プレイヤーの一人、レオだ。
　リアルの名字が獅童といういかめしいものらしく、それに合わせてキャラクターも猫の獣人族にしているらしい。ヒナタとはベータテスト以来の友人だが、ルーガロッチとはさらにそれ以前から親しくしていると聞いていた。
　ルーガロッチについての話しなら、一番信頼が置ける情報源でもある。

「レオは査察の話し、知ってる？」
「当然。知ってる」
「参加するの？」
「俺以外の金の樹のメンバーは中の人が電脳関係に弱いからな。こういう任務に俺は必須なんだよ」
「社長……ルーさんは」
「あの人は専門家じゃねえから。それよりお前だ」
「どういう意味？」
「高校生のお前に手伝わせる事件か、ってな」
　ネットとリアルは別物。それを普段から口にしているレオは、金の樹でも特に、二つの世界を切り離している一人だ。
　その彼にリアルの話しを持ち出されて、ヒナタは唇をとがらせる。

「リアルの年齢は関係ない。ここでは、サポートマスターの権限と責任を任されたヒナタだよ」
「限度がある。詳しくはいわねぇが、脳みそを茹でられたくはねーだろ？」
「……そういう理由でルーさんとロップくんを説得しようとして、失敗した。だから私に自分から参加したくないって言わせたい？何か隠してる、言えない事がある？」
　レオの噛みつくような威嚇が混じった言葉に違和感を憶えながら、ヒナタは冷静に切り返す。

「時々、お前が怖くなるぜ」
予想以上に深く斬ってしまったのだろう、レオの表情は硬い。
だが、ヒナタとしても、子供は布団でネンネしていればいいと言われて、大人しく引くつもりにはなれない理由があるのだ。
特に、特にこの場所では。

「私はフリーのサポートマスターだから、協力義務はないってことで、断ってもいいけどね。金の樹と連携訓練もしてない。金の樹が警察なら、私は正義の傭兵だから行動を選ぶ権利が残ってるし」
「無報酬なら傭兵って言わねぇよ」
「あるよ。私はこの世界で遊ぶのが楽しい。この世界に居場所が欲しい。それを守れるなら、他に代えがたい報酬だと思う。……サポートマスターは利用料金無料だしね」
思い出して付け加えたヒナタの言葉の何が面白かったのか、レオは少し驚いてから、面白そうに「その程度で？」と問いを重ねる。

「学生なめんな。月額二千円の利用料は安くないんだってば。それだけ有ればフリータイムで二回もカラオケに行けるし、ご飯なら学校で食べる昼食におにぎりプラスだよっ」
大まじめな顔で主張するヒナタに、そりゃ大金だと、レオは笑ってすまなかったと頭を下げる。
もっとも、レオの顔は大笑いしそうなのを必死にこらえてのものだ。

「そういう事なら、どうだ、せっかくだし金の樹に加入しないか？」
金の樹に加入する。
それはサポートマスターが、サポートマスターしての仕事を積極的に行うなら、捨てがたい選択肢の一つだ。
それはたとえば、正義の心を持った一人の人間が、警察という組

織に入ることで、匿名性を持った『おまわりさんの一人』になれるように。逆恨みを含めた様々な悪意から、組織はその身を守ってくれる上に、努力すれば功績を評価してくれるのだ。
　ほかにも、アイテムや情報などで様々なサポートを受けられる事もあって、活動するサポートマスターのほとんどは、今や金の樹に所属している。

「ごめんね。そういう気には、まだなれなくて」
「あー……俺こそ、わるかった。で、」
「言ったでしょ、この世界を守るためなら、少しのリスクは気にしないって。レオも、ルーさんも、ロップくんもそうでしょ」
「ロップイヤーは別として、俺達は半ば、仕事なんだがな」
　レオが言葉を濁す理由を、ヒナタは知っている。
　半ば仕事というのは、その通りの意味だと。

「でも、あとの半分は？」
「あーまー、たしかにそういうわけだからそうなんだけどな？　……わかった、俺の負けだ。だが、出来れば考えが変って欲しいと思ってるのは、伝えておくぜ」
　これ以上ヒナタを理性で説得するには、伏せ札を開くしかないとレオにも伝わったのだろう。
　しかしそれが出来ないので、情に訴えるように状況を投げて肩を落とす。

「まあ、これから学校があるから、そこで考えるよ」
「俺も出勤しなくちゃな……ふぁ……」
「なに、寝てないの？」
「覚醒教の関連資料をまとめたり、ログを洗ってたからよ」
「ほら、リアルにちょっとリスクを負っても、この世界に入れ込んでる」

ふふんと、いたずらっ子のように笑ったヒナタが、レオに背中を向ける。

「そういう問題じゃ」

そして次の瞬間にはヒナタの姿は消えていて、

「ないっての」

レオはログアウトした後に残る小さな光の粒が飛び交うエフェクトを前に、不機嫌そうに鼻をならす事しかできなかった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2321y/

---

世界を賭けろ　――　レイズ・ザ・ワールド

2011年11月6日03時05分発行